

阿蘇の草原管理

1. 地域の概況

阿蘇地域は外輪山に囲まれて標高が 400m 以上あり、年平均気温が 13 度と冷涼な気候にある。降水量が年 3200mm と湿潤であるため、本来の自然植生は広葉樹林が成立する地域である。しかし、広くなだらかな地形が牛馬の生産に適しているため、1000 年以上にわたって草地として維持管理されてきた歴史がある。近年になって生活形態の変化に起因する、草原の劣化が見られるようになった。



図 熊本県阿蘇市

2. 草原利用と維持管理の歴史

平安時代の法律「延喜式」に阿蘇の牧野に関する記述があり、優れた馬を都に進上することと定められていた。江戸時代には催合（もやい）という草原を共同利用する入会制度が認められており、草原の維持管理システムができていた。明治にはそれまでの役牛から肉牛の生産が増えた。昭和 41 年には国営大規模草地改良事業が起工、昭和 48 年に完成し、阿蘇は全国有数の畜産生産基地となった。第二、三次産業が発展する大きな流れの中で、同 48 年にはオイルショック、平成元年には牛肉・オレンジの自由化、同 13 年には BSE の感染牛が発見されるなど、農家への直接的な打撃が続いた。就農者の高齢化も進み、牛の飼育頭数、放牧頭数ともに大きく減った。

3. 阿蘇草原再生

草原を維持するには常に多くの人手を要する。近年、放置された草地の森林化がみられるようになった。環境省は平成 8 年以降、牧野組合やボランティアと協働し、草原保全のための検討や試験的事業を進めてきた。地元や関係行政機関でも、草原の維持・保全に関する動きが活発になっている。平成 17 年に「阿蘇草原再生協議会」を設立し、阿蘇草原再生の指針となる全体構想が策定され、今後これを共通認識として阿蘇の草原再生事業を進めていくこととしている。



阿蘇 輪地切りの様子

出典：

http://www.env.go.jp/park/aso/effort/nature_aso.html

4. 阿蘇の希少生物

阿蘇の草地にはハナシノブやオオルリシジミなどの絶滅危惧種が生息している。降水量が多く草原が発達しにくい日本では、阿蘇の人々が維持してきた二次的自然環境はこうした草原性の生物にとって貴重な生息場所となっている。

出典：環境省 阿蘇くじゅう国立公園 http://www.env.go.jp/park/aso/effort/nature_aso.html